

はじめに

2008年、私はバラク・オバマの演説を初めて耳にした。ちょうどオバマがヒラリー・クリントンと民主党大統領候補の座をめぐって選挙戦を繰り広げている最中だった。アメリカ合衆国大統領をはじめとする政治家たちの演説は、私が専門とするコミュニケーション研究（Communication Studies）の分野では昔からよく研究されていたが、当時の私はそれらの研究にも政治演説自体にもそれほど馴染みがなかった。よい機会だと思い、私はオバマの演説をいくつか聴いてみた。そして驚いた。それらの演説は、私が政治演説という言葉から連想するものとはかけ離れていた。オバマは自分にとって、そして聴衆にとって、身近で切実な問題について、わかりやすく語っていた。その言葉は、理性的であると同時に情熱的だった。政治的であると同時に文学的だった。私はオバマの演説がなぜ世間の注目を集めているのか、そして政治演説がなぜコミュニケーション研究者の関心を集めてきたのかを理解した。

オバマは演説を続け、大統領に選出された。大統領就任後も、オバマは現在に至るまで、数かずの演説を行ってきた。私はそれらの演説の中からいくつかを取り上げて、コミュニケーション研究の観点から分析し、それを論文の形で公刊した。オバマ政権が終わりを迎えようとする今、これらの研究成果を踏まえつつ、オバマの演説の全体像を一冊の本にまとめておきたい。それが本書を執筆した動機である。オバマは彼自身がしばしば参照するエイブラハム・リンカーン、ジョン・F・ケネディー、マーティン・ルーサー・キング・ジュニアなどの政治指導者たちと並ぶ優れた政治演説家として、アメリカ合衆国の歴史に名を刻むだろう。その演説の全体像を本の形に記録しておくことには、それなりの社会的意義があるだろうと考えた。

本書は幅広い読者を想定して書かれている。オバマの演説に興味を持つ読者はその筆頭である。オバマの演説集は日本でもかなり多く刊行されているが、その全体像について学術的観点を交えながら記述した本は意外に少ない。その

意味で、本書には希少価値があると思う。また、現代アメリカ社会について興味を持つ読者にも、本書は何らかの示唆を与えられると思う。オバマはその演説において、アメリカ合衆国が抱えるさまざまな問題について語っている。オバマの演説について論じた本書を読むことで、読者はこれらの問題についての理解を深めることができるだろう。大統領の演説、アメリカ合衆国の社会と文化、さらにはアメリカ合衆国に限らず、広く民主主義社会における言葉と政治の関係について興味を持つ読者に本書を手にとっていただければ幸いである。

本書の執筆に際しては、できるだけアメリカ合衆国で生み出された英語の情報を参照することとした。これはオバマの演説、新聞記事、テレビ報道、研究論文、書籍など、すべての情報について当てはまる。オバマの演説がアメリカ合衆国において英語でなされたものである以上、それにできるだけ接近する形で執筆を進めたかったということが一番の理由だが、他の理由もある。それは筆者がアメリカ合衆国の大学院でコミュニケーション研究を学んだということ、そしてこの分野の研究が同国において盛んだということである。したがって、英語で公表されたアメリカ流コミュニケーション研究の知見を参照しながら議論を進めることは、私にとって自然なことだった。さらには、本書の初期原稿の大部分が筆者のアメリカ合衆国における在外研究中に執筆されたという事情もある。当時の私は現地で生み出された情報を手に入れやすい状況にあったため、これを最大限活用することとした。こうした理由から、本書ではアメリカ合衆国において生み出された英語の情報に大きく依拠しつつ議論を展開した。このやり方には長所と短所があるだろうが、本書においては筆者の研究者としての背景と強みを生かすべく、この手法を採用することとした。

このことに関連して、本書においてオバマの演説の重要な箇所を引用する場合、英語原文をそのまま記した上で、筆者による日本語訳を付けることとした。オバマ自身の言葉の味わいをそのまま読者に伝えたいと考えたからである。また、広く一般に知られているものは別として、英語の人名や地名などが出てきた場合には、各章で初出の際にその英語表記を書き加えた。さらに論文等からの引用においても、必要に応じて英語原文を付した。日本語の中に英語が混入することで文章の統一感が失われるかもしれないが、それよりも読者が

英語原文を直接参照できることから得られる利益のほうが大きいと考えた。

オバマの演説は面白いと言われる。それらはなぜ面白いのか、どのように面白いのか。本書では、私が感じるオバマの演説の面白さを、できるだけわかりやすく、具体的に読者に伝えることを試みた。それがうまくいっているかどうかは読者の判断に委ねたい。

大統領の演説と現代アメリカ社会
Understanding Contemporary American Society
through Presidential Speeches

目 次

はじめに	i
------	---

第1章 大統領と演説 1

1. 語る大統領 1
2. 演説の作成 4
3. 演説の聴衆 5
4. 演説と文脈 6
5. 演説と政策 7
6. 本書の構成 8

第2章 2004年民主党全国大会基調演説 11

1. はじめに 11
2. 演説 15
 - (1) オバマの自伝 15
 - (2) アメリカ的価値観 17
 - (3) 民衆の期待 18
 - (4) ジョン・ケリー 19
 - (5) 戦争 19
 - (6) 多様性と連帯 21
 - (7) 希望の政治 23
3. 反響 24
4. 学術的議論 26
 - (1) フランクとマクフェイル 27
 - (2) ロウランドとジョーンズ 31
5. おわりに 33

第3章 2008年大統領選における演説 35

1. はじめに 35
2. 大統領選出馬表明演説 37

3. アイオワ州党员集会勝利演説	42
4. サウスキャロライナ州予備選勝利演説	46
5. 大統領選勝利演説	52
6. まとめ	61
第4章 人種	65
1. はじめに——ジェレマイア・ライト事件	65
2. 「ア・モア・パーフェクト・ユニオン」演説	68
(1) 歴史への接続	68
(2) 身体に刻まれた多様性	70
(3) ジェレマイア・ライト	71
(4) 黒人たちの怒りと白人たちの憤り	75
(5) アシュリー・バイア	78
3. 反響	79
4. 学術的議論	82
(1) フランク	82
(2) テリル	84
(3) ロウランドとジョーンズ	86
5. おわりに	88
第5章 医療	91
1. はじめに	91
2. 先行研究	94
3. 演説	96
(1) 現状——医療保険制度改革の必要性	96
(2) 改革の方向性——三つの目標	98
(3) 改革の詳細	99
(4) 批判と懸念に対する応答	101
(5) エドワード・ケネディーからの手紙	105

- 4. 考察 109
- 5. おわりに 112

第6章 移民..... 114

- 1. はじめに 114
- 2. 背景 116
- 3. 移民制度改革をめぐる議論 118
- 4. アメリカン・ドリーム 121
- 5. 演説 122
 - (1) 移民の国 123
 - (2) 非合法移民と移民起業家 125
 - (3) 国境管理 127
 - (4) 移民制度改革に向けての連帯 128
 - (5) オバマの提案 129
 - (6) 普通の人びとによる偉業 130
- 6. 考察とまとめ 133

第7章 銃..... 137

- 1. はじめに——サンディー・フック小学校銃乱射事件 137
- 2. 銃規制をめぐる議論 139
- 3. 世論 144
- 4. 銃規制法案可決に向けての演説 146
 - (1) 当事者の声 149
 - (2) 超党派の呼びかけ 150
 - (3) 銃を持つ自由と社会的責任 152
 - (4) 個人の小さな物語 155
- 5. 銃規制法案否決後の演説 157
- 6. おわりに 160

第8章 まとめ	164
1. バラク・オバマの演説	164
2. バラク・オバマの演説と現代アメリカ社会	167
3. 言葉と政治	168
おわりに	170
参考文献	174